

第三部 言葉の時間形態 ―想起・約束・現在―

B.約束としての説教

第13章

- 聖霊の現臨において約束は現実化される。現在というものはいずれも将来に対する固有の関係を持っている。
- われわれは文学的実例によって将来に対する今日の間係を認識する。(～p390 L5)
- 説教の実例は、聖書の約束と時代の問いかけの両者に対して、説教がどれだけ正しく対処しうるか、についての解明を与える。
 - カール・バルト (p390 L6～p392 L4)
 - モルトマン (p395 後ろからL3～p400)

1. 文学的実例が示す将来に対する現在の関係

神学に於いては、過去にのみ目が向けられ、約束に対する感覚は殆どない。人類の進歩に対する信仰が力強く栄え、過去の史実を追放してしまった時にも、(神学に於いては) 将来よりも過去の方が魅力を持った。だが、この過去に魅了されたおかげで、新約聖書は将来を目指すものだと見抜けた。「聖書全体が終末論的である。そして、多くの説教壇においては、このことについて全く沈黙が守られ荒れている」(バルツァー『実践的終末論・現代の福音宣教におけるキリスト教の希望』の引用による)。

文学的実例1) ヤーコブ・ヴァン・ホッディス 「世界の終わり」(1911年)

人間に対する脅威が宇宙的な規模を持つに至る。これに対抗するには、これを皮肉るイロニー¹によるしかない。

嵐が起こっている、荒々しい海が
ぶあつい堤防を崩そうと大地に襲いかかる
ほとんどの人間が鼻かぜをひいている
列車は端から落ちる

「鼻かぜを引いている」イロニー

サムエル・ベケット 『幸福な日々』

リヒャルト・ローテ『記者と線路の発明』『汽車と線路の発明』を救済史的に評価。

⇔ ヴァン・ホッディス 列車が橋から落ちるのを「世界の終わり」として予告。

¹ アイロニーもしくはイロニー (irony, Ironie) とは、表面的な立ち居振る舞いによって本質を隠すこと、無知の状態を演じること。この言葉の語源は、ギリシア語のエイローネイアー εἰρωνεία「虚偽、仮面」、「よそおわれた無知」である。

世界の終末を巡る知識を得ようと切実なもの。

ただ、不安はイロニーによってもてあそばれる。イロニー黙示文学。

文学的実例2) エルゼ・ラスカー・シューラー 「世界の終わり」

二つのモチーフが絡み合う。(1) 愛と死のモチーフ (2) 世界中の涙と神が死んだらしいということ。…失われたパラダイス、そのパラダイスの戻って来た島としてのエロスとセックス。

ヴァン・ホッディスの作品のような詩が、地震計のように予告していたことの沈殿物、こだまのようなもの(答えでもあったか)が、ほぼ十年後の「危機の芯が悪」の中に見られる。

2. 説教の実例ーカール・バルト

◆ 1922「ローマ書」第二版

「徹底してあますところなく終末論でないようなキリスト教は、徹底してあますところなくキリストとは無関係である。」

バルトは、「終末論」と言っており、「黙示文学」とは言っていない。

黙示録1：4²により、こう書き換えることは許されるかも。

「徹底してあますところなく『来るべき方』を目指していないようなキリスト教は、徹底してあますところなくキリストとは無関係である。」

◆ 説教集『来たれ、造り主なるみ霊』 イザヤ書60：19～20「永遠の光」についての説教

→ホッディスの役に立つか、エルゼ・ラスカー・シューラーが慰められるか。

ここで希望の言葉が語られているか。この説教は約束を与えているか。どの程度？

- テキストは直ちにキリスト論的に解釈される。
- ここで告げられる「来るべき方」は、言葉において来られる方。
- 説教の隠された主題は、「律法と福音の一致と相異」。
- 「わたしたちの耳に響くのは二つの真理であります…、あらゆる瞬間に私達のための神の言葉となるのであります」。ここでは、“言葉がくる”ことが、再臨の代わりとなり、未来形が現在になってしまう。将来に於ける一回性が、その度に反復できるものとなる。
- 「この手に捕らえられて、私達はどうなるのでしょうか」ー将来を約束する言葉が期待されるところで、バルトは提出された問いを拒否してしまう。「問

² 黙示録1：4-5「今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、又、玉座の前におられる7つの霊から、更に証人、誠実な方、死者の中から最初に復活した方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから恵みと平和があなたがたにあるように」

題は私達にあるものではありません。ただわたしたちは、自分達がこの手に捕らえられていることを知ればよいのであります」重要な発言は、完了形と現在形でなされてしまう。

- ここでは、霊と言葉において到来される方のこと、つまり、時と時における到来が語られているのであって、再臨のことではない。
- 世界の終わりや、すべての灯を消すことについて語ることを除外していないが、少しの重みももっていない。バルトのこの説教は、世界の終わりについて、他人事一力強いキリストの御手のうちにある将来について語ろうとしない。「告知」も「約束」も、来るべき方よりも、既に来られ、ここにおられる方を強調している。

3. 未来論の可能性について

◇未来学とは？

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%AA%E6%9D%A5%E5%AD%A6>

◇今は、未来についての計画的科学が、未来の主人になろうと試みている。

クラウス・コッホの語る未来論

「未来論の告げる使信は、『未来の蓋然性と可能性とを正しく把えさえすれば、時をたえず適応して、現在の状況に対応しうようになる』。我々が望みうるものが何かも明らかになり、それにより（我々の望みうるものが）実現可能となるだろう。未来から現在へという展望が我々に、現在の様々な出来事を秩序づけ、知性的判断によって混沌に対処しうるということだ」

↓

これまで「伝統」が果たして来た役割を「未来論」が引き受け、未来論は現在を規定し、規範を定める働きをするのか？その際、未来論の使信は、いわば「裁きと恵み」となり、一種の恐るべきもの（Tremendum）と魅惑するもの（Faszinosum）とが明らかになっている点では、ルドルフ・オットーのヌミノーズ³に似ている。未来の恐れに戦慄させながら、人間の計画的理性への思慕に恍惚とさせる。「これは爆弾の影に怯えつつ、その蒙がひらかれ、組織づくられた資本主義がもたらす使信」

それが不安を克服できるのか。

³ 訳注64：オットーの『聖なるもの』に出てくる「ヌミノーズ」の概念については、詳説の必要はなし。聖なるものである「ヌミノーズ」は、ひとを”畏怖せしめるもの”（戦慄的神秘：Mysterium Tremendum）と、ひとを”魅惑するもの”（魅惑的神秘：Mysterium Faszinosum）とを合わせ持つ。

混沌からの救いの女神となるのかー未来に対する態度は、脅威と無力の感覚、優越と権力の感覚との間を動揺する。つまり、現代の不安を克服するには至らない。

文学的実例 1) クルト・マルティ 「セックス映画館」

文学的実例 2) ジャック・ド・ブルボン・ブッセ

文学的実例 3) ギュンター・グラス「卵の中で」

優越の感覚と無力感、イロニーによる黙示文学的思考

- 未来論から見えて来るのは、現代を生きる者が、「未来に直面しつつ、自分の栄光と悲惨とを見出す人間」であるということ。
- この人間に教会は、何をどのようにして説教しなければならないのか。
- “「来るべき方」よりも「既に来られた方」を強調し、「キリストの到来はまず言葉によるもの」とする全く正しい”説教（バルトの説教）が、未来に魅了されつつ脅えている時代に生きる者には、もはや力ある説教ではないことは明らか。

↓

新しい課題

キリストを来るべき方として宣教すること、つまり、新約聖書が将来を目指していることを改めて尊重すること。

（今の状況）

- 未来という時間形態において到来するキリストの説教をする事がすっかり片隅のこととされている。
- 聖書主義的硬化に陥る危険がある



「到来する方についての使信」を思想家として責任をもって考え、哲学の領域において実証する必要が生じる。

4. ユンゲル・モルトマンとゲアハルト・サウダーの労作「希望の神学」